

Title	老舗企業の長期存続プロセスと戦略パターンに関する経時的研究
Author(s)	加藤, 敬太
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54288
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	かとう けいたい 加藤 敬太
博士の専攻分野の名称	博士（経営学）
学位記番号	第 23546 号
学位授与年月日	平成22年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 経済学研究科経営学系専攻
学位論文名	老舗企業の長期存続プロセスと戦略パターンに関する経時的研究
論文審査委員	(主査) 教授 金井 一頼 (副査) 教授 浅田 孝幸 教授 小林 敏男

論文内容の要旨

本論文は、老舗企業の経時的分析から長期存続プロセスのメカニズムの解明を行ない、新たな理論的洞察を導出しようとした研究である。

本論文の問題意識を提示した第1章に続く第2章では、老舗企業研究をレビューし、これらは老舗全般に共通する内部資源の現状分析に偏向していたため経時的分析の必要性が提起される。

第3章では、経時的分析を行ううえで、戦略パターンの長期変動を扱ったコンフィギュレーション・アプローチなどをレビューした。これらの研究は、分類論として発展したため、歴史的な定性的方法論の必要性が主張されていることを指摘し、新たな事例分析の方向性が示される。

第4章では、戦略パターンの長期変動を捉える分析フレームワークとしてステークホルダー・アプローチを提示した。このアプローチは、「企業と社会論」など規範的アプローチとして発展したため、戦略論の観点から批判的に検討し、ミクロな行為主体とマクロな社会的構造を包括的に結びつける分析フレームワークとして提示した。

第5章から第7章までは、事例分析を行った。第5章では、伝統保守型の老舗企業として、味噌メーカーで最も古い八丁味噌メーカーの2社を取り上げた。この事例では、江戸時代から続く八丁味噌を造り続ける2社は、保有する伝統的資源が酷似しているにも関わらず、それぞれ独自のダイナミズムがみられることが明らかにされる。

第6章では、変革型の老舗企業として清酒メーカーの清洲桜醸造を取り上げた。清洲桜は、先代の時代まで地方の零細な酒蔵であったが、現社長への代替りから、戦略パターンを転換して業界慣行にとらわれず紙パック製品を開発し準大手メーカーへと成長するプロセスが考察される。

第7章では、多角型の老舗企業として食酢メーカーのミツカンを取り上げた。ミツカンは、近世期に酒造の傍ら酒粕を使った食酢を製造したことから始まり、明治期は地方財閥として様々な事業を展開し、戦後は総合食品メーカーとして食酢以外の事業に多角化する。ミツカン自ら「変革と挑戦」と語るこのようなダイナミズムを考察する。

そのうえで、第8章では、3つの事例の共通点を示した後、先行研究に対する理論的洞察を議論したうえで、企業が長期存続するための戦略にとって重要となる「存続有効性」というコンセプトが提示される。

最終章となる第9章では、結論と理論的含意ならびに実践的含意を示し、最後に残された課題をまとめた。

[論文内容の要旨]

本論文は、老舗企業の経時的分析から長期存続プロセスのメカニズムの解明を行ない、新たな理論的洞察を導出しようとした研究である。

本論文の問題意識を提示した第1章に続く第2章では、老舗企業研究をレビューし、これらは老舗全般に共通する内部資源の現状分析に偏向していたため経時的分析の必要性が提起される。

第3章では、経時的分析を行ううえで、戦略パターンの長期変動を扱ったコンフィギュレーション・アプローチなどをレビューした。これらの研究は、分類論として発展したため、歴史的な定性的方法論の必要性が主張されていることを指摘し、新たな事例分析の方向性が示される。

第4章では、戦略パターンの長期変動を捉える分析フレームワークとしてステークホルダー・アプローチを提示した。このアプローチは、「企業と社会論」など規範的アプローチとして発展したため、戦略論の観点から批判的に検討し、ミクロな行為主体とマクロな社会的構造を包括的に結びつける分析フレームワークとして提示した。

第5章から第7章までは、事例分析を行った。第5章では、伝統保守型の老舗企業として、味噌メーカーで最も古い八丁味噌メーカーの2社を取り上げた。この事例では、江戸時代から続く八丁味噌を造り続ける2社は、保有する伝統的資源が酷似しているにも関わらず、それぞれ独自のダイナミズムがみられることが明らかにされる。

第6章では、変革型の老舗企業として清酒メーカーの清洲桜醸造を取り上げた。清洲桜は、先代の時代まで地方の零細な酒蔵であったが、現社長への代替りから、戦略パターンを転換して業界慣行にとらわれず紙パック製品を開発し準大手メーカーへと成長するプロセスが考察される。

第7章では、多角型の老舗企業として食酢メーカーのミツカンを取り上げた。ミツカンは、近世期に酒造の傍ら酒粕を使った食酢を製造したことから始まり、明治期は地方財閥として様々な事業を展開し、戦後は総合食品メーカーとして食酢以外の事業に多角化する。ミツカン自ら「変革と挑戦」と語るこのようなダイナミズムを考察する。

そのうえで、第8章では、3つの事例の共通点を示した後、先行研究に対する理論的洞察を議論したうえで、企業が長期存続するための戦略にとって重要となる「存続有効性」というコンセプトが提示される。

最終章となる第9章では、結論と理論的含意ならびに実践的含意を示し、最後に残された課題をまとめた。

[審査結果の要旨]

本論文は、老舗企業の長期存続のメカニズムを戦略論の視点から経時的に分析した先駆的な実証研究である。本研究は、先行研究の詳細な検討をもとに、ステークホルダー・アプローチと戦略パターンを統合した独自の分析フレームワークを構築するとともに、存続メカニズムの異なる4社（3つのケース）の経時的分析を通じて「存続有効性」「戦略的価値」という新たなコンセプトを提示し、老舗企業の長期存続メカニズムを解明した優れた独創的研究である。本研究は、今後検討余地のある概念を提示しているが、独自のフレームワークによって老舗企業研究の新たな視座を拓くとともに老舗企業の長期存続のメカニズムを戦略論的視点から初めて解明した理論的価値の高い研究であり、よって本論文は、博士（経営学）の学位を授与するに値する論文であると判断する。